まれにみる大洪水

桜町小・6　佐藤　尋也

大雨の中、父の車で帰宅する。マンホールからは水がふき出し、まるで川の中を車が水しぶきを上げて走っているようで、すごいことが起きているのだと実感した。父親が、

「まだ階段の一段目だからだいじょうぶだよ。でも、祖父母の言うことをちゃんと聞いて留守番してね。たのむよ。」

と言って、仕事先へすぐに向かっていってしまった。

車から降りたら、ひざあたりまで水につかり、急いで家にかけこんだ。次第に雨の量が増え、水の勢いがどんどん強くなっていた。夕方六時ごろ、夕食を食べ始めたが、外の様子が気になって、何度も席を立って外の様子を見に行った。

「あ、車のタイヤの上まで水がつかっちゃったよ。」

と、ぼくが知らせると祖父母がしょんぼりとしていた。その時、試しにメジャーで水位を測ったら、六〇センチメートルまで水が上がってきていた。

辺りが暗くなると、どんどん水かさが増す。三台のスマートフォンからは、けたたましいアラームが鳴りひびき、レベル五を伝えていた。レベル五は「緊急（きんきゅう）安全確保」と言うそうだ。命が危ない状態になってしまうので、上の階に上がり身の安全を確保する必要がある。二階から、裏の川を見ると、ていぼうから水があふれ出し、水面が道路と一体化して見えた。水はキラキラと街路灯の光を浴び、かがやいていた。

もうひなんはできないとあきらめて、静かにテレビを見ていたらトイレの方から、ゴボゴボゴボと音がした。トイレへ向かうと水が便器からふき出していた。さらなるひがいを防ぐために、ぼくはドアに使用禁止のはり紙をした。再び不安になり、げんかんのドアを開けると、あと五センチメートル位で家に、浸水（しんすい）してきそうになっていた。辺りの車は、浸水（しんすい）してしまい、エンジンが水につきビービーと警報音が鳴りひびいている。そこからも水かさが増し続けていた。ぼくは不安でいっぱいになりすぎて、頭が働かなくなった。

それから少し時間が経ち、午後九時半ごろに外を見ると、水かさが少し減っていたので安心した。

次の日の朝、急いで外へ出た。水深は九十七センチメートル位に達していた。夜に見た景色とは、全然ちがっていた。門のところに印をつけて、今後のための目安にした。家の場所が角地にあるので、水が勢いよくおし寄せられたのか、流されてきたどろがコンクリートへ張り付いて川底のようになっていた。水のおそろしさを物語っていた。祖父は片付けに追われていた。ぼくもあせだくになりながら、どろをはがしたり、ゴミ拾いをしたりして片付けを手伝った。水がぼくたちにきばを向けたら、こんなにもおそろしいことになることをはだで感じた。車や家など、いろいろなものが水につかったり、人や物が流されてしまったりする。次からは冷静に今回の経

験を生かして、高台に車を置いたり、安全な場所へひなんしたりしようと思った。川がはんらんしたら、どんなひがいが予想されるか、もしもの時のために日ごろからどういう準備をしておくことが大切か、家族で話し合いをしようと思った。地域の人たちともアイデアを出し合いながら、水害に強いまちづくりに取り組む必要もあると思った。自分で危険を判断できるようにしなければならないと思った。

ぼくは、この豊川でまれにみる大洪水を経験したが、世界に目を向けるともっとひどい大洪水が起こっていることを知った。パキスタンの大洪水は去年の六月から十月にかけて起こり、死者は約一七〇〇人近く、雨量は一七〇〇ミリリットルも降り、国土の三分の一が水没したそうだ。現在も約一八〇万人が、れつあくなかんきょうで暮らしている。飲み水もなく、家も食料もなく、不便な暮らしをしている様子がテレビで報道されていた。その時、自分は、なんて幸せな生活を送っているのだろうかと思った。水害があったとは言え、一ヵ月位で何もなかったかのような生活ができている。自分はいつでも好きなことができている。しかし、パキスタンの子供たちは、今も元の生活を取り戻すためにがんばっている姿を見て、自分はいつでも見守られて生きているのだと感じた。パキスタンの子供たちの生活と比べてみるだけで辛いと思った。自分が今までどれだけ幸せな生活ができているかとつくづく思わされた。様々なかんきょうで生活をしている人が世界中にたくさんいると感じた。パキスタンの子供たちが一日でも早く、もとの生活にもどることができるようになるといいなと思う。

今回の大洪水を通して、日々の暮らしのありがたさや、家族に助けられながらぼくは生活できているということを感じることができた。これから、もし災害が起こったとしてもみんなで協力して乗りこえていきたい。

5・9